

都会の夜の屋上で～年上お姉さんとの初体験～全編(①～④)

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「今日も疲れたな……」

思わず、小さく愚痴を漏れる。

夜の予備校。最後の講義が終わり、ようやく息がつけたところだ。教室を出て、俺は人の流れとは逆に、屋上へ続く階段を上っていく。

「それにしても……予備校なんて、本当に通う意味あるのかね」

本来、生徒なら出口へ向かうか、講師に質問しに行くかのどちらかだろう。けれど、俺は違った。なんとなく——無性に屋上へ行きたくなった。

両親は開業医で、家はそれなりに裕福だ。だから俺も、当然のように医者になる道を期待されている。医学部に進学するのが“家の決まりごと”みたいなものだ。

「あんなことがなかったらなあ……」

階段を踏みしめながら、低く息が漏れる。

とぼとぼと足を進めるたび、胸の奥がずきりと痛んだ。

「医大生ハーレム生活が……」

誰もいない階段の踊り場で、そんなくだらない妄想をこぼす自分に、苦笑いをした。

親は浪人生の俺に、一人暮らしをさせてくれて、仕送りだって十分すぎるほど送ってくれている。甘えている自覚はある。

「外車乗って、大学の美人と付き合って、童貞も卒業して……そんな未来だったはずなのにな」

ぼつりと、現実逃避みたいな夢を吐き出す。

中高一貫の男子校。成績は悪くなかったし、授業だけでついていけたから塾に通う必要もなかった。結果、女の子と出会う機会なんて一度もなかった。

「そもそも予備校、周りは高校生ばっかりだしな。手え出したら、普通に犯罪だし」

階段の手すりに手を添えながら、ため息が落ちる。

「浪人生は勉強で必死だもんなあ。てか、そもそも美人いねえ……」

適当に言い捨てる。

そもそも、美人がわざわざ浪人してまで、いい大学を目指す——なんて選択肢自体が少ないらしい。

階段を一段ずつ上がりながら、思いついた愚痴をぼつぼつと吐いていく。やがて、屋上の扉の前に着いた。錆びついた取っ手を回して押し開けると——ギィ、と耳障りな音が夜に混じった。

途端に視界が開ける。

そこに広がっていたのは、俺のいた田舎では見たことのない都会の夜景だった。ビルの灯りが四方八方で瞬き、空は雲がかかったみたいに、街の明かりでほんのり白く濁っている。星なんて一つも見えやしない。

——町医者の家に生まれた以上、どうせ地元の医学部に進学するんだ。

だから今のうちに、都会暮らしを味わわせておこう。多分、親もそんな魂胆なんだろう。まあ、地元の医学部くらい、本来なら楽勝だし。

そんなふうに自分に言い聞かせるようにして、夜風を一つ吸い込んだ。

ふと、視線の先——右側に人影があった。女性だ。

都会の灯りに照らされたその横顔は、まるで舞台のスポットライトを浴びた女優みたいで、思わず息を呑むほど整っていた。

見とれかけた、その瞬間。

……って、おい、おいおいおい！

彼女は——手すりの、外に立っていた。

冗談じゃない、本気で死ぬ気か！？

「ちょ、ちょっと待った！」

反射的に声が出た。きっと、医者家で育った本能だ。

声に気づいたのか、彼女はゆっくりとこちらを向いた。

——美人。いや、そんな言葉じゃ足りない。

息をするのも忘れそうなほど、整った顔立ち。けれど、その表情には、生きている人間の温度がなかった。

間違いない。あれは、死ぬ覚悟を決めた人間の顔だ。

両親の病院で何度も見てきた——医師から“死”を宣告された患者と同じ光。

その静かな絶望を、俺は知っている

ここは言葉を選んで慎重に動かないと——どこかで読んだ本の一節が頭をよぎる。人質事件で、立てこもる犯人の心理を少しずつ揺さぶって人質を解放させる、FBI の交渉術。今はその“応用編”だ。

仮にも、俺は医者の子だ。目の前にいる若い命を、簡単に手放すわけにはいかない。

「こんな夜に、屋上で何してるの？」

なるべく軽く、他愛ない口調を心がける。顔を見れば、彼女がこれから何をしようとしているかは分かっている。だからこそ、決して慌ててはいけない。穏やかさを装い、相手の心に隙を作るのだ。

「……………」

彼女は答えない。沈黙が、冷たい風のように二人の間を渡る。

「そんなところに立ってたら危ないよ。景色を見るなら確かに手すりの外は眺めやすいけどさ」

冗談めかして言ったつもりだった。だが、声の端に真剣さが混じっているのを自分でも感じていた。

えっと…… FBI って、こういう時どうやって犯人を止めてたっけ。

そうだ、人質を助けるには——まず“共感”と“相手の立場を否定しないこと”だったはず。

「女の子がさ、こんな夜中まで屋上にいたら危ないって。親御さんも心配するよ？」

すると、彼女の唇がかすかに動く。

「あんな親……死んじゃえばいいんだ」

親を憎んでいるタイプか……

やばい方向だ。でも、まだ慌てるな俺。FBIは、こういう時どうしてたっけ……そうだ、“自分が必要とされてる”って感覚を思い出させるんだ。

「友達だって、悲しむよ？」

俺の言葉に、彼女はゆっくりと正面を向く。だが、その瞳には何の揺れもない。

「友達なんて……もう……いい友達なんて……もういい」

手応えゼロ。いや、むしろマイナスだ。

「でも、こんな美人さんなんだしさ。彼氏とか……いるでしょ？」

最後の望みにかけて口にしてみる。

「もう、別れた」

……詰んだ。完全に詰みコースだ。

ああ、どうしよう。八方ふさがりって、こういう時に使う言葉で合ってるよな……。

——彼女を必要としてくれる人がいない。きつとずっと一人だったんだ。 なら、せめて俺だけでも——

「こんな美人なのにさ。死ぬなんて、もったいないよ」

それは本心だった。今の彼女に生气はないけど、それでも目を奪われるほど綺麗だったから。

「なんてどうでもいい。このポンコツみたいな頭で生まれた自分が、嫌なの。もう……全部やめたい」

——つつ。どうすればいいんだよ、これ。説得の言葉なんて通じる気がしない。だったら、もう力技で距離を詰めるしかないのか？

俺はそっと、彼女の方へ一歩踏み出した。足音を殺して。

「でもさ、ここにいるってことは、予備校にはちゃんと来てるじゃん。勉強してるんだろ？」

成績だって、伸びるよ」

自分でも苦しい理屈だと思った。けど、それでも何か言っていなきゃ、黙った瞬間に彼女は風みたいに消えてしまいそうで。

「伸びないから、こんなことしてるの！」

声が震え、感情があふれた。

——でもいい。怒りでも何でも、感情が外に出るなら、まだ間に合う。

「苦手な教科って、どれ？」

俺はゆっくり、しかし確実に距離を詰める。あと数メートル。話をつなげれば、手を伸ばせるところまで近づける。

「全部……」

「そっかぁ……全部か」

思わず、小さく息が漏れる。

そこまで追い詰められていたのか。得意な科目が一つでもあれば、私立でもどこか望みはある。けど、全部が苦手なら、その光すら見えないのも分かる。

夜風が吹き抜ける。彼女の髪が揺れて、街の明かりに照らされた横顔は、あまりにも儚かった。

——これは、かなり受験的には絶望的だな。